2007 年 5 月 28 日 Bentham 研究会 (論文紹介)

論文紹介：Marc D. Hauser, 2006. The Liver and the Moral Organ. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*. 1:214-220.

児玉聡

Marc Hauser, PhD (1959-)
Harvard College Professor
Professor of Psychology, Organismic & Evolutionary Biology and Biological Anthropology
Adjunct Professor, Graduate School of Education and Program in Neurosciences
Co-Director, Mind, Brain and Behavior Program
Fellow, Center for Ethics
Director, Cognitive Evolution Lab

http://www.wjh.harvard.edu/~mnkylab/LPPI.html

http://www.wjh.harvard.edu/~mnkylab/HauserBio.html

Hauser, M.D. (2006). Moral minds: The unconscious voice of right and wrong. New York, Harper Collins; London, Time Warner.

はじめに

言語学における「言語器官(language organ)」の発想を流用して、「道徳器官(moral organ)」という考え方を研究手法として採用する。近年の実証研究(とりわけ脳機能の欠損した患者を用いた研究)の知見を利用して、われわれが「道徳器官」を発達させてきたという話をする。

言語と道徳の能力 (faculties of language and morality)

1950 年代、チョムスキーの生成文法→言語学は人文学から自然科学へ(神経生物学、心理学、発達学、進化論的知見が加わる)。「近代言語学の革命」

チョムスキーの設定した問いはどの知識の領域にも重要な問い。今後の研究のロードマップにもなる。

1. ある能力の、成熟した状態を記述する機能原理(operative principles)はどのようなものか、
2. そのような機能原理はどのようにして獲得されるか、
3. その機能原理は行動においてどのように用いられるか、
4. その機能原理は領域特定的な能力に由来するのか、あるいは一般的能力に由来するのか、

5. その機能原理はどのように進化したのか。

言語能力と道徳能力のアナロジー：Rawls, Harman, Dwyer, Mikhail などが言っている。要するに、普遍的道徳文法(universal moral grammar)があり、個々人が成長する特定の文化に応じて、特定の道徳体系として発現する。bimoral になることは、ネイティブ英語話者が中国語を学ぶくらいに難しい。

このアナロジーを検証あるいは反証する実証研究が出てきたのは最近のこと。

道徳的知識を解き明かす (unlocking moral knowledge)

道徳判断の由来に関する三つのモデル

1. Humean Creature (心): 出来事の知覚□情動(emotion)□道徳判断 (無意識的な直観)
2. Humean (心) + Kantian (脳) Creature: 出来事の知覚□意識的な推論□道徳判断 (と、ヒューム的な回路。ふたつの判断が一致する場合は良いが、対立する場合は調停プロセスが必要)
3. Rawlsian Creature: 出来事の知覚□行為とその結果の、原因・意図の(無意識の)分析□道徳判断□情動および意識的な推論

近年、1.を支持するのは A. Damasio と J. Haidt、2.は Greene et al., 3.は Hauser と Young。

このようなモデル化により、脳科学による実証研究が可能になる。たとえば、脳機能の欠損により、情動の機能が失われた人は、1.だと「通常の」道徳判断が下せないが、2.だと理性的なプロセスを経た道徳判断が下せる可能性があり、3.だと道徳判断自体は正常となる(ただし、サイコパスのように、感情の抑制がないために行為に影響が出る可能性がある)。

道徳器官の穴 (Holes in the moral organ)

道徳的知識の神経心理学的理解はまだほとんどない。そこで最近の萌芽的研究を紹介する。

- 腹内側前頭葉皮質(ventromedial prefrontal cortex [VMPC])損傷患者の研究：情動のインプットが欠如した患者は、目前あるいは将来の意思決定ができない、という先行研究□道徳判断についてはどうか？
    - VMPC の患者、他の部位の脳損傷患者、健常群で比較。
    - 非道徳的なジレンマ(高い金を払えば時間の節約ができる状況など)、非個人的な道徳的ジレンマ(暴走列車の事例、スイッチを動かすかどうか)、個人的な道徳的ジレンマ(暴走列車の事例、太った人を突き押して暴走列車を止めるか)の三つのシナリオ。「あなたなら X しますか?」と尋ねた。
    - 非道徳的ジレンマ、非個人的な道徳的ジレンマについては三群とも同じ反応。

- 個人的な道徳的ジレンマについては、VMPC の患者が「功利主義的」な応答をする率が有意に高かった。
- →腹内側前頭葉皮質の損傷(情動の欠損)は、社会的ジレンマのすべてに影響を与えるのではなく、また道徳的ジレンマのすべてに影響を与えるのではなく、個人的な道徳的ジレンマの判断に選択的に影響を与えると思われる。
- →情動がすべての道徳的判断にとって因果的に必要という強い(ヒューム的)主張は退けられる。
- また、個人的な道徳的ジレンマの中でも、意見が分かれ即答できない問い(high conflict: 二人の子どものうちのいずれかを実験の被験者に差し出すか、二人の子どもを失うかという母親の選択など)ほど、VMPC 患者が他の群とは違った、非常に功利主義的な答えを出す率が高かった。意見が一致し即答できる問い(low conflict: 10 代の少女が新生児を窒息死させる)では、三群とも意見は一致する傾向にあった。別の見方では、VMPC 患者は 10 代の少女のケースのように、自分に役立つ(self-serving)事例に関しては、他の二群と意見が一致する傾向があったのに対し、他人に役立つ(other-serving)事例に関しては、功利主義的な応答をする傾向にあった。
- 学べること二点：第一に、道徳的判断における情動の役割は選択的、つまりどう行為すべきかについての社会規範が明確でなく、かつ強度の情動が引き起こされる状況において作用する。この結果からすると、おそらく、VMPC 患者は功利主義的考慮と義務論的考慮のジレンマを感じることができないだろう。
- 第二に、ヒューム的モデルも、ロールズ的モデルも間違い。情動はすべての道徳判断に因果的に必要なわけではない(→ヒューム的モデル)。また、すべての道徳的判断の生成に無関係なわけでもない(→ロールズ的モデル)。個人的・high conflict・他人に役立つジレンマにおいては、情動は重要な因果的役割を果たす。
- といっても、脳機能のマッピングはまだ不完全なので、情動と道徳的判断の以上の関係はまだ暫定的。

- インターネットを用いた、意識的推論と直観的判断に関する質問紙調査(Hauser ら)
  - 数千人対象。十分な正当化なしに道徳的判断を行なうケースがある。
  - 功利主義的な帰結は同じだが、義務論的制約の種類が異なる場合：(1)意図と予見、(2)作為と不作為、(3)接触と非接触。人々はこれらを区別した道徳的判断を下した。
  - (2)と(3)は正当化できるが、(1)に関しては十分に正当化できず、無意識的なプロセスを経た道徳判断がなされているようだ。
  - (意図と予見等の)心的状態の帰属に関係する脳機能に障害を持つ人の研究によって、このような現象にさらなる知見を得ることができるだろう。
  - 別の有名な話(Knobe 2003)で、ある企業の CEO が(1)企業が何百万ドルももうけるが、同時に環境が破壊されるような方針を採用した。また、(2)同じように企業がもうけるが、同時に環境保護にも役立つような方針を採用した。被験者にこの件について尋ねたところ、(1)の場合は CEO は環境破壊を意図していたと考える傾向があったのに対して、(2)の場合には意図的に環境を保護したわけではないと考える傾向があった。この非対称性についても、脳機能の研究でさらに知見が得られるだろう。

道徳的比喩 (Moral metaphors)

道徳を言語との類推で考えるのは heuristic なもの。道徳判断を生み出すのに役立つ(一般的な)プロセスと、道徳判断を生み出すのに選択的に関係するメカニズムを同定したい。

二つのレベルで研究が望まれる。(1)社会的ジレンマの区別をさらにしていくこと。(2)さまざまな区別をするために特定の脳機能に障害を持つ患者群を見つけて研究すること。道徳的判断と道徳的行為における情動の役割を見るには、VMPC 患者やサイコパス患者を使えばよい。社会的規約(social conventions: たとえば、ホストがゲストに対して、ワイングラスの中に唾を吐いてよいと言ってもできない、など)と道徳的ジレンマの区別に関する研究のためには、選択的な嫌悪感の欠如が見られるハンチントン舞踏病患者を使えばよい。たとえば、50 年来結婚していた夫が、死んだ妻とセックスをすることについて、普通の人は許されないと感じるが、ハンチントンの患者は、夫が妻を愛しているならまったく問題ないと答えた、など。

コメント

- *Philosophers' Magazine* (Issue 38, 2nd Quarter 2007, p. 27)でたまたま見つけた。最近の心理学や脳科学の知見を人間(および霊長類)の道徳的行動や心理の分析に適用するという流れにある。
- 道徳判断がどのように生れるのかというヒュームの時代の問いを、脳生理学的に考えようとする(眉唾だが)面白い動き。こないだのシンガーの ethics and intuition 論文も参考にして、論文が書けそうだ。
- しかし、脳機能の異常を利用しているとはいえ、成人を対象にやった場合、道徳判断の生成プロセスが、生まれつきあるものなのか、文化的・教育的に形成されるものなのか、判断がつかないのではないか。たとえば、情動が欠損している VMPC 患者は個人的な道徳的ジレンマ状況においては功利主義的で、他の人々が持つ義務論的制約に訴えることがなかったとあるが、他の群が義務論的制約(とその情動)を身につけたのは、特定の文化や教育によるものであるのか、あるいは脳に異常がなければ成長のある段階で必ず身につくものなのか、わからないのではないか。
- また、直観的判断が、どの程度情動と関係しているかという話はおもしろいが、これは直観的判断の正当性を示すものではない点に注意。シンガーが言うように、"philosophical discussions of these cases from Thomson onwards have been preoccupied with the search for differences between the cases that justify our initial intuitive responses. If, however, Greene is right to suggest that our intuitive responses are due to differences in the emotional pull of situations that involve bringing about someone's death in a close-up, personal way, and bringing about the same person's death in a way that is at a distance, and less personal, why should we believe that there is anything that justifies these responses? If Greene's initial results are confirmed by subsequent research, we may ultimately conclude that he has not only explained, but explained away the philosophical puzzle... there is no point in trying to find moral principles that justify the differing intuitions to which the various cases give rise. (P. Singer, Ethics and Intuition, *Journal of Ethics*, 2005:9:347, 348)

- 道徳的判断の生成の問題だけでなく、motivation の問題も研究が進むと良い。motivation は情動によるのか、あるいはそれ以外の motivation もあるのか。情動に欠ける VMPC 患者は、それでも功利主義的な道徳的判断の通りに行為するのか。
- 上の二点は言語とのアナロジーがあまり役立たない点と思われる。
- ヒュームやロールズの理解は大丈夫かな。